

R.H. Blythの研究 ブライスの分かりにくさについて

On the Arcane English Employed by R. H. Blyth

杉本京子

SUGIMOTO Keiko

I found English sentences written by R.H. Blyth extremely difficult and had a hard time understanding them. I had first thought it was totally due to my poor English proficiency. After further study, I have come to think that there might be some causes of the difficulty inherent in his English. It is amazing to think that among such a large number of his works, there wasn't even one book translated into Japanese. Now in this thesis, I tried to analyze where some of the difficulties may lie.

1 前書き

私は、上田先生のゼミに出るまで R.H. Blyth の名前すら知らなかった。しかし、上田先生からお聞きするブライスは、不思議な魅力をもった謎多き人物であり、大いに興味をそそられた。R.H. Blyth(1898 - 1964) は俳句、川柳、禅を欧米の人々に紹介した人として知られており、ことに俳句の英訳は定評がある。A HISTORY of HAIKU (俳句の歴史)二巻、HAIKU(俳句)五巻の研究書で、1954年に東京大学より博士号を授与された。また彼は、若いころ鈴木大拙の禅に関する本 *Essays in Zen Buddhism* (禅宗における諸問題、1927) や *Zen Buddhism and its Influence on Japanese Culture* (禅宗とその日本文化における影響、1938) などを読んで感激し、それ以後鈴木大拙の禅の信奉者となり、禅の研究を進めて *Zen and Zen Classics* 五巻を残した。ブライスの全著作は北星堂書店から出版されているが、俳句に関する書や、彼の最初の著作 *Zen in English Literature* は版を改めて今も書店に並んでいる。しかし *Zen and Zen Classics* は絶版となり入手困難となっているところをみると、禅の研究書は読む人があまりいないということであろうか。

どちらかといえば、ブライスは今日、日本人の多くから忘れられた存在である。現天皇

の家庭教師であったという、多くの人はヴァイニング夫人なら知っているけど、そんな人いたの？という。昭和天皇の「人間宣言」の草稿を書いた人だということ、多くの人が驚くが、また、ほとんどの人が「人間宣言」なるものがあると知ってはいるが、読んだことはないという。ブライスは敗戦直後の日本の歴史と関わり、屈指の日本文化通であったにもかかわらず、ラフカディオ・ハーン程には日本人に親しまれることなく忘れられていることを私は残念に思う。日本人に親しまれていない原因の一つは、彼の作品が一つも日本語に訳されていないところにあると思う。ブライスが禅の関係者の中で唯一信頼し敬愛していた鈴木大拙は、彼の死後ブライスの禅の理解は「孤負」(独断的自分免許)に陥っていると書いたというから、¹ 禅の関係者の方でも彼の書を敢えて取り上げることもないのだろう。

私は修論では、禅についてほとんど何も知識がないので、外国人の眼を通して“禅とは何ぞや”ということを教えてもらうのも、自国文化の理解の仕方の一つの方法ではないかと思って勉強を始めた。しかし、読み始めてみると理解できないことだらけで、私の貧しい英語の力と、知識の狭さでは彼の著作を理解するのは容易なことではなかった。結果的には分るところだけをつまみ食いして何とか修論は書き上げたが、彼の膨大な著作のほんの一部分を齧ってみたにすぎない。ブライスの最初の労作 *Zen in English Literature and Oriental Classics* (イギリス文学ならびに東洋の古典における禅、北星堂書店、1937)での第1章は“What is Zen?”である。また遺作となった *Zen and Zen Classics* (禅と禅の古典、北星堂書店 1960~1970)の第一巻の第1章が同じく“What is Zen?”である。私は最初の“What is Zen?”で理解できなかったものを、後者が補完してくれるかと期待したがそういうものではなく、前者とは全く異なる世界が展開されていた。前者はイギリスの(イギリスに限らずヨーロッパの)優れた文学に禅を見つける喜びに満ちていた。しかし後者には禅批判に満ちていると思った。この二つの What is Zen? を比べてみての私の感じたことは次のようなものであった。修論のまとめに私はこう記した。

さて、二つの What is Zen? を比べての結論であるが、*Zen in English Literature* の What is Zen? では、ブライスは禅の美酒に酔っていた。その時、詩と宗教とは同義語であり、分かち難いものであった。そして、ブライスはイギリス文学のなかに禅を見出すことに熱中していた。しかし、戦中戦後を経る間に、その酒は、酸っぱく不味いものになってしまっていた。後の *Zen and Zen Classics* の “What is Zen?” は、その変質

したものを苦々しい思いでこぼしてしまったことを書いている。杯を空にしたが、ブライスは杯を石に投げ打つことはしなかった。空にした杯に自分の美酒を満たしたかったのだろう。その美酒は、禅を中にふくみながらも禅を超える詩であったと思う。

2 ブライスのわかりにくさ

限られた時間の中で修論は何とかまとめたが、ブライスの言っていることが理解できずに苦しんだところが多く、今読み直してみてもさっぱりわからないところがたくさんある。私は、それをただ自分の英語力のなさと、禅、キリスト教、欧米の文学についての知識の乏しさから来ていると思いこんでいた。しかし、翻訳されたものが一つもないということは、それだけではないのではないかと考えるようになった。そこで私がどんなところにもどのように躓いたかの例を幾つか挙げてみたい。こう考えたらと助言していただけたらどんなに嬉しいかわからない。

A 錯綜する引用

Zen in English Literature の第1章は鴨長明の『方丈記』の引用から始る。「魚鳥の有様を見よ。魚は水にあかず。魚にあらざれば、その心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざれば、その心を知らず。閑居の気味も亦かくの如し。住まずして誰か悟らん」と言う部分が引用されている。これについて、

This ... is true of the life of Zen, which is the real religious , poetical life. (これぞまさしく禅の生活であり、本当の宗教的、詩的生活である)と言っているところまではよくわかる。しかしこの文に続けて

But, as Mrs. Browning says in *Aurora Leigh*,

The cygnet finds the water, but the man
Is born in ignorance of his element.

Dogen(1200-1253), founder of the Soto Sect of Zen in Japan, expresses this more poetically:

The water-bird
Wanders here and there
Leaving no trace,
Yet her path

She never forgets.

という風に、Mrs. Browning の詩の一節や道元の歌が続けざまにでてくる。プライスの文章は、ほとんど全編を通じてこのように洋の東西を問わず、詩や歌、小説の断片が次々に散りばめられているところに特徴がある。そしてなぜそこに引用されているのかわかりにくい。この一頁を読んだ時にも、なぜ長明、ブラウニング、道元が並列されているのかわからなかった。

長明は富みや地位を願った挙句、晩年になってそれらの空しさを悟り、人里離れた方丈の生活に心の安らぎを見出した。ブラウニングの詩は白鳥の雛は生まれるとすぐから水辺の在りかを見つけ出す。それに比べて人間は生きていくのに本当に必要なこと (element) は何かを知らずに生まれてくる。つまり、人生は富でも地位でもなく、小さな静かな草庵の生活を愛して暮すことだと悟るのに長明は一生を費やした。それに比べて動物は生まれながらにして、生活を充足するにたる最小限必要なものを知っていると、ブラウニングの詩は知っているのだろう。道元の「水鳥の往くも還るも跡たえて されども道は忘れざりけり」という歌は、水鳥はこれからどう進むべきかの指針はどこにもなくとも、自分の行く道はちゃんと知っていると言っているが、禅による生き方はそれと同じだという風に理解した。私たち人間は“生命の原理”を見失い、名声や地位や富に眼を奪われ、水鳥のように真っ直ぐに道を辿ることはできないということであろうか。

このように、考え考え読んで来て、2 ページ目になると、今度は Bacon の "The sun passeth through pollutions and itself remains as pure as before, (日の光はどんなに濁った大気を通して差し込もうと、光は依然として純なる光である) という言葉が突然出てきて驚く。しかし、落ち着いて読めばこのベーコンの文と、次に続く文との類似に気付く。

Zen passes through all our definings and remains Zen as before. (禅は禅についてさまざまながいわれていても、依然として禅は禅である)

As we think of it, it seems dark, but "dark with excessive light. " (われわれが禅について考えるとき、禅は闇のようにおもえるが、それはまぶしすぎてわからない闇なのだ)

ここの quotation mark は、シェイクスピアか何かの有名な語句かもしれないが、今はとにかく詮索せずに、禅はわれわれの生きる闇を照らす光だと言っているのだとっておこう。

Yet we read books on Zen, and more books, hoping to find on some page, in some sentence or other, the key to a door which is only a hallucination. (禅に関する本を読み、

もっとたくさん読んで、どこかの頁に、何かの中に禅の入り口を見つけようとするが、それは幻にすぎない)

Zen says “Walk in! “ Never mind the key or the bolt or the massive – seeming door.
Just walk in! (禅は足を踏みいれよ! という。その門がいかに重々しく見えようとも、鍵や門を気にするな。ただ踏み一歩ふみ込め!)

1 頁目から通して考えると、小動物でさえ生まれながらにして身につけている、生きるための element を持たない人間を導く光は、禅である。禅は、知識として書物から得られるものではなく、直接禅門を叩けとっているのだと思う。

このように読み取ってみたが、この後に Traherne という人の言葉 “His name is now... His essence is all Act.” が引用され、続いてミルトンの詩が 6 行紹介される。その詩は、以前その植物は、他の土地では美しい花をつけて珍重されていたのに、この土地では田舎の若者が泥足で踏みにじるという内容である。この後 10 行ばかりの中にゲートとサミュエル・ジョンソンが登場し、芸術と禅が論じられる。

Truth is everywhere, but is more apparent in science, Beauty is in dustbins and butcher’s shops as well, but is more visible in the moon and flowers.(真実はどこにでもあがるが、しかし科学的に見たほうが明らかである。美はゴミ箱や肉屋の店先にあるが、月や花に見た方が見え易い)

つまり禅は、ある行動、ある種の芸術作品や詩などにはっきり見ることができるというのだ。以上のように要約してみたが自信はない。何しろ何行かおきに、ゲートのヨハネ福音書訳に曰く、Traherne ,*The Anticipation* に曰く、ミルトン *Comus* に曰く、ゲート曰く、ジョンソン曰くと、短い文章の中に次々にでてくるので、それらが、何を強調するために引用されているのかこんぐらがってしまい、頭の整理が追いつかず、非常にわかりにくいものとなっている。私はまず、この細切れの引用文の多用にわかりにくさの第一の原因があるとおもった。

B 漢詩の紹介

別の面からのブライスの分りにくさについて述べてみたい。*Zen in English Literature* の第二章 Religion is Poetry をみても分りにくさの事情は第一章と同じである。

The most profound, the most religious utterance in the world is a sentence in the Kongo Kyo. (世界で最も深遠で宗教的な言葉は金剛經の一文である) として「応無所住而生其心」という金剛經の言葉がとりあげられている。「まさに住するところ無くして其の心を生ずべし」と読み、その意味は『岩波仏教辞典』によれば「水は方円に従うが、其の主体性を失っているわけではない。何れの形に姿を変えても水としての働きをする。これが応無所住而生其心の意味である。仏教の修業ではその目的は悟りである。悟りの内容は般若の完成である。最高の般若を得る事が修業の目的であるが、しかしその般若に囚われると今度は其の般若に迷うことになる。応無所住而生其心の精神は、善悪のいずれにおいてもいささかの執着の観念を持つてはならないことを教えている」と解説されている。

この語の英訳に、“Awaken the mind without fixing it anywhere.”を使っているが、ⁱⁱ この言葉自体には我々の心を動かす力はないとブライスは言う。

It has no cadence, no tone; it is too abstract, too vague; too cold, too inhuman. It lacks all the humanity, the emotion, the poetry, the religion,... (この言葉には韻律もトーンもない。あまりにも抽象的で漠然としており、冷たくあまりにも非人間的だ。人間らしさ、感情、詩、宗教がまるで欠けている...) ⁱⁱⁱ この後に福音書か何かの一節が引用されて比較されるので、わかりにくく混乱を招くので、それは省く。

とにかく、あらゆることはその人の心次第(everything depends on the mind^{iv})だから、この言葉を聞いて心を動かされ、それによって生命、人生の秘密を解き明かすことができた人もいたのだとして、ブライスは慧能を挙げている。慧能は「ひとたび金剛經の語を聞いて、心即ち開悟す」といわれている。その慧能について次のように書いている。

If it had not been for E-No, it is doubtful whether Zen would have made any further progress in China, and whether it would have ever arrived in Japan. What would Japanese culture have been without the stimulus of Zen? No tea ceremony, no Bushido, no No, no Haiku - all this and more contained in the words, “Awaken the mind without fixing it anywhere.” ^v (もし慧能が、この金剛經によって開悟していなかったら、中国の禅は進んだらうか、日本に禅が伝えられたらうか。禅が伝えられていなかったら、日本の文化はどうなっていたらう。茶道、武士道、能、俳句 みんな「応無所住而生其心」という言葉に根ざしているのだ)

慧能以後、無味乾燥だった金剛經のこの言葉の中に深く隠されていた詩と宗教とが、これを読んだ人々の心から弾け出したのだとあって、ブライスは次の漢詩を紹介している。

清流無間断、 碧樹不曾凋。

山花開似錦、 澗水湛如藍。

の方は中国の名僧趙州禅僧の言葉で、「清流間断なく、碧樹かつて凋まず」と読む。実は後半があって、この後に「禅心もし斯くの如くならば 見性豈其れ遅からんや」と続く。つまり清流が昼夜を分かたず流れるように、常磐木がいつも青々としているように、初発心を堅持してくじけなければ、必ず悟りはひらけるという意味だそうだ。は『碧巖録』の大龍智洪禅師の言葉。「色身は敗壊す、如何なるか是れ堅固法身」(私たちの肉体は、何れ土に埋められ、ついには跡形も無くなってしまふ。それならば永遠不変・不生不滅といわれている堅固法身はどうなるのか)と聞かれて応えたのがここに引用された半分の漢詩だそうである。「山花開いて錦ににたり、澗水湛えて藍の如し」と言うのは、山の花は開いてもたちまち散り水は湛えているようでも不断に流れている。この生滅きわまりないものの中に、不生不滅なものがあり、その刹那の中に永遠なものがあるという意味だそうだ。^{vi}

ブライスはこの二つの漢詩を英訳して紹介したあとにつぎのように書いている。

The poetry, the religion of these you bring with yourself; there is no spoon-feeding here. ^{vii} (これらの言葉の詩と宗教は自分自身で 味読せよ。ここには囓んで含めるようなものはない。)

しかし、上に述べたような、これらの漢詩が詠まれた背景の説明もなく、しかも漢詩の半分しか紹介されていない。字面の意味は分ったとしても、これらのなかの poetry はともかくとして、そこに含まれている religion まで読み取れる人がいるだろうか。私はこんな所にブライスの文の理解し難さがあると思う。

しかも、私は今まで書いて来たことを、ブライスの文意の大筋として読み取ってきたが、それでいいのだろうかという迷いが生じるほど、間々にさまざまなものが挿入されている。それは A でみたのと同じである。正味三ページの中に、『方丈記』の一文、Burns のねずみの詩について 16 行、福音書の一節 4 行、慧能の伝記的な文(六祖壇經、第一章)『無門関第四十一則』で、これらと本筋との繋がりがわかりにくいのだ。先の二つの漢詩に次いで『禅林句集』の中から“日日出、日日落”という漢詩の一部が紹介される。この詩は当たり前で退屈なことを言っているようにみえるが、実はマクベスの科白に劣らぬ

悲劇性を含んでいる。^{viii} またワーズワースの *Stepping Westward* の一節と同じくらい希望に満ちているとブライスは言って、それらが2, 3行ずつ紹介されている。^{ix} できることなら、マクベスやワーズワースを中途半端に引用するよりも、漢詩全体を紹介してもらった方が、そこにある悲劇性も希望も読者には伝わってくるのではないかと思う。

C 芭蕉の句

以上述べてきたことを日本の文学に関して言えばとって芭蕉の句が三つ並べて紹介されている。

Because of Spring / This morning a nameless hill / Is veiled with mist.

春なれや名もなき山の朝霞

The first snow: / The leaves of the daffodils / Are bending

初雪や水仙の葉のたわむまで

Gazing at the flowers / Of the morning glory, / I eat my breakfast

あさがほに我は飯くふをとこ哉

この三つの句について、ブライスは *poetical*(詩的)であると同時に、*religious*(宗教的)だというのだが、なぜ宗教的なのか、さっきの金剛經の文句とどう関係があるのか、やはり私にはよくわからない。そもそも、この三つがこのように並列されていることからして納得がいかなかった。

の句は、まず「春なれや」と春になった喜びを表し、それもすぐ身近に春が来た喜びを歌っている。「名もなき山」というのはいつも見慣れていて、古来詩歌などに歌い上げられる様な名山ではなく、通いなれた山道なのであろう。名もなきものを愛する芭蕉の気持ちが読みとれる。

の句は *HAIKU, Volume 1* にも取り上げられていて、* こちらの英訳は少し異なっている。

The first snow, / Just enough to bend / The leaves of the daffodils.

Zen in English Literature の方の訳は、初雪がもう、水仙の葉をたわませるまで降ったと、その降り積んだ量に注目している。*HAIKU* のほうは、初雪に、もっともっと降れ、水仙の葉をたわませるほど降れという期待感で、初雪の喜びを捉えているので、こちらの訳のほうがいいと思う。芭蕉句集を見ると、この句と同じ時に詠んだと推測されているもう一つの句が並んでいる。

「我がくさのとの初雪を見むものと、よそにありても空だにくもり侍れば、いそぎかへることあまたびなりけるに、師走中の八日はじめて雪降りけるよろこびを

はつゆきや幸い庵にまかりある」^{xi}

この“まかりある”にはつい笑ってしまうが、まるで子供のようなはしゃぎようだ。自分の庵で初雪をみたいというのは、おそらく去年の冬は旅先で初雪をみたのだろう。雪だ、雪だと草の庵の窓を開けて空を仰ぎ、間断なく舞い落ちてくる雪を眺め、今度は軒下のまだ雪に濡れぬ土や水仙を見たりしている。もっと降れもっと降れ、水仙の葉をたわめるほど降れと、わくわくする喜びが感じられる。

の句は *HAIKU, Volume1* に次のように紹介されている。

Basho's lack of affectation is shown also in the following:

和角 蓼蛸句 朝顔に我は飯食ふ男かな

Answering Kikaku's poem about *tade* (smart-weed) and the firefly. I am one / Who eats his breakfast, / Gazing at morning-glories. This was Basho's reply to ;

草の戸に我は蓼食ふ蛸かな 其角

A firefly; / I partake of the smart-weed, / In my hermitage. Kikaku

Kikaku means that, like the firefly, he prefers the night, has eccentric tastes, enjoying the bitter flavour of the smart-weed that other people dislike. Basho says that the true poetic life is not here, but eating one's rice and pickles for breakfast and gazing at whatever nature and the seasons bring us.^{xii} (芭蕉の気取りのなさは次の句にも表れている。この句は其角の蓼と蛸を詠んだ句に応えたものである。其角の句は、私は夜と風変わりな味のする蓼が好きで、誰もが臭いと嫌う蓼の臭いを楽しんでいる。芭蕉は詩的な生活はそんなものではない。朝飯は漬物で食べ、自然と季節が与えてくれるものを眺めるところにあるといっている。)

其角が、三十一歳の芭蕉の許に来たときは十四歳の少年であったといわれているが、その頃にはもうすでに医学・儒学も学んでいたという秀才であった。若い其角が、天和三年師の芭蕉に代わって、蕉門最初の撰集『虚栗』を編集したという。この時其角は二十三歳であり、芭蕉は前の年の江戸の大火で深川の草庵を焼け出され、秋元藩(今の山梨県都留市)の国家老高山伝右衛門の許に身を寄せていた。『虚栗』は、それまでの談林調を脱して新風を確立しようとした大変意欲的な句集といわれている。漢詩をとりいれ、8・7・5など破調の多いこの句集は「天和調」とよばれる。其角の発句に次のようなものがある。前

書きが「酒債尋常往々処二有 人生七十古来稀ナリ」で「詩あきんど年を貪ル酒債さかて哉」人生七十まで生きるとはめったにないのだから借金をして酒をのもうというのです。自分のことを、「詩あきんど」と詩を売って酒手を稼いでいると言い切ったところが見事だ。この詩商人が「草の戸に蓼食ふ虫」なのだ。諧師であること自体、世間から言えば蓼食う虫にちがいないし、当世流行の談林調とは異なる詩を作る自分たちは、一風変わった好みを持っているということになるだろう。「蓼食ふ虫」といわずに、夜光る「螢」だといったところに、自負心が表れているように思うが、やはり夜な夜な酒に酔うような生活が歌われているのも確かだ。これに対して不惑の年を迎えている芭蕉は、自分は早起きをして、朝顔を見ながら朝飯を食うような、普通の人を送っている健全な日常生活をしている男だと応えている。プライスが“Gazing at whatever nature and seasons bring us.”というのは、芭蕉の句が自然と季節のもたらすものの中から生み出されることを言っているのであろう。そんなすがすがしい生活から新しい蕉風は生まれてくるのだというのだ。芭蕉は其角とは反対の生き方をしている、若い其角をたしなめるためにこの句を詠んだのだろうか？岩波古典体系の『芭蕉句集』の注は「其角に対する訓戒の意を寓する」ととっている。さらに補注には、この句の訓戒の意をうけて、其角の酒癖をたしなめる芭蕉の手紙が偽作されたことが書かれている。^{xiii} たしかに“蓼食ふ螢”から世間からはよく言われない女に浮き身をやつしているというイメージも浮かぶ。「詩あきんど」の句以外にも「大酒に起きてものうき裕かな」「十五から酒をのみ出てけふの月」など放蕩無頼の生活を思わせる発句がたくさんあるから、そんなところから芭蕉の偽手紙まで作られたのだろう。

『虚栗』の「跋文」の中で芭蕉は「侘びと風雅のその生(つね)にあらぬは、西行の山家をたづねて、人の拾はぬ蝕(虫食い)栗なり。恋の情をつくし得たり。…下(しも)の品にはまゆごもり親ぞひの娘、嫁姑のたけき争ひをあつかふ。寺の稚児、歌舞の若衆の情けをも捨てず、白氏が歌を仮名にやつして、初心を救ふたよりならんとす。」(其角の侘びと風雅が普通とは異なっているのは、西行に心を寄せながら、人がひろわぬ虫食いの栗を拾っているところである。恋の情も尽くしている。…下々の生活では箱入りおぼこ娘、嫁姑の壮絶な争い、寺の稚児、歌舞の若衆のホモセクシュアルな恋など。白楽天の漢詩を俳諧としているので、平俗でわかり易くして初心者理解の助けとなっている。)と書いている。

これを読むと、芭蕉は其角を否定するのではなく、むしろ自分と其角の違いは違いとして認め、かつ其角の発句の新しさも賞揚しているように思える。

このように自分なりに調べたり考えたりしてみると、芭蕉の俳諧に対する考え方の一端を知ることはできるが、ブライスのそっけない説明からだけではそのようなことは分からないし、数ある芭蕉の句のなかから、なぜこの三つが選ばれ、なぜこの順序に並べられているのか、その必然性があるのかどうかやはり納得がいかない。

D Zen and Zen Classics のわかりにくさ

Zen and Zen Classics のわかりにくさは *Zen in English Literature* のそれとは異なるように思う。*Zen and Zen Classics* にはそれほど多種多様な文学作品は引用されていないし、文脈も込み入っているわけではない。しかし、使われている言葉から、表現しようとしていることの内容が理解できないのだ。一つには私の禅の知識がないことにもよるのかもしれない。

The Mind is both a mirror and an ever-expanding eye which creates what it sees, and destroys what it does not. I clear my mind of cant. I learn all I can of the culture of the past, and remove my prejudices of rank and nationality. (心は鏡でもありどこまでも広がっていく目でもあり、その目は捉えたものを創造し見なかったものは破壊する。私は心を明晰なものとし偽善的な言辞に乗せられないようにする。できるだけ過去の文化を学び、階級や国籍からくる偏見を取り除きたい。)

初めて読んだ時には an expanding-eye, destroy, cant, rank and nationality などの言葉の意味するものが分からずに困った。しかし、考えた挙句「澄んだ心は何でも平等に映し出す鏡であり、視野は広げようとすればどこまでも広がっていくものだ。その澄んだ心、目で捉えたものを自ら信じ、自分の目で見えていないものは信じない。そうすればさまざまな政治的宣伝やデマゴーギーに乗せられない。過去の文化を学ぶことで、階級や民族にたいする偏見から開放される」という意味ではないかと思った。cant が何を意味するかは分からないが、たとえば「王道楽土」とか「八紘一宇」などにとってもいいのではないだろうか。

この *Zen and Zen Classics* は、日本の敗戦後間もなく書かれたことから、ブライスが日本の植民地である朝鮮で16年間過ごしたこと、太平洋戦争が始まると即日捕らえられ、「交戦国外国民間人収容所」に収監され4年間すごしたこと、敗戦直後皇室存続のため

GHQ との橋渡し役を務めたこと、昭和天皇の「人間宣言」の草稿を書きその詔勅が新聞紙上に発表されたが、必ずしも草稿の意図どおりではなかったことなど、さまざまな経験から出た言葉として理解しなければならないと思った。禅が戦争中に軍国主義と安直に結びついたことを目のあたりにして、このような禅批判が文の中にとぐるをまいているような、一読しただけでは分かりにくい文になったのではないだろうか。

今上に引用した生き方をプライスが求めているとしたら、こうした目・心を養うのに禅は本当に応えてくれるかという検証を、*Zen and Zen Classics*でしようとしたのではではないかと、今はおもっている。

紙数が尽きて意をつくせないが、またの機会があればもっと掘り下げてみたいと思う。

-
- i 川島保良編『回想のプライス』(回想のプライス刊行会)、昭和59年 この中に所収されている新木正之介氏の思い出の中にてでくる。
- ii *Zen in English Literature* p289 にはこの他に5つの英訳が載せられている。鈴木大拙の訳は次の2つである。 Cherish thoughts that are dwelling on nothing whatever. Awaken one's thoughts where there is no abode whatever.
- iii 同上書 p27
- iv 同上書 p26
- v *Zen in English Literature*, p27
- vi 西部文浄『分類総覧 禅語の味わい方』p33 及び p200 参照
- vii *Zen in English Literature*, p29
- viii 第五幕第五場、マクベスがマクベス夫人の死を知った時の科白で、この後パーナムの森が動き始める。筑摩文庫の松岡和子の訳 「明日も、明日も、明日も、とぼとぼと小刻みに歩を進め、歴史の最後の最期にたどり着く。すべての昨日は、愚かな人間が土に還る死への道を照らしてきた。消える、消える、束の間の灯火！...後略
- ix 前川俊一訳『ワーズワース詩集』弥生書房 世界の詩 37 136~138 頁 「...その声のこだまは、人情のあたたかさに 私のまえにはてしなくひろがる世界を通過して はるばる旅する思いを 織り込めたのであった。」
- x *HAIKU, Volume 1* p83
- xi 岩波古典文学大系『芭蕉句集』頁204
- xii *HAIKU, Volume 1* p295
- xiii 『日本古典文学大系 芭蕉句集』177 頁、269 頁